

平成 24 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	24K12	氏名	森 勇人
研究主題 —副主題—	「読み解く力」の育成を意識した授業の評価研究 —ループリックを用いた分析から—		
所属校	杉並区立和泉小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>東京都教育委員会では、必要な情報を読み取り、解釈しながら問題を解決する過程において、児童・生徒がどの段階で、どのようにつまづいているのかを明らかにすることを目的に、平成 22 年度から「読み解く力」に関する調査を実施している。「読み解く力」は各教科で必要とされている力であるが、平均正答率は高くない。指導に際して、同じ評価の観点で括られていても教科により指導法に微妙な違いが生じるため、筆者自身も国語で児童に身に付けさせた読解力を、他教科でいかなる方法で活用させるのかという悩みがあった。また、そのためにはどのような授業を展開すればよいのかという視点での教材研究が行えていなかった。</p> <p>新学習指導要領では、知識を「活用」することによって、思考力や判断力、表現力を身に付けさせることが求められている。東京都の「読み解く力」も新学習指導要領で求められている力を身に付けさせるという観点で作られており、これらはすなわち PISA (OECD 生徒の学習到達度調査) で求められている力である。先ほどの課題を解決するためには、PISA 型学力を中心に据えた授業作りが必要になる。</p> <p>そこで本研究では、授業の要である「教師の発問」に着目し、発問分析を通じた省察を行う。発問の内容と PISA 型読解力で設定されている 3 つの観点（「情報の取り出し」「比較・関連（解釈）」「熟考・評価」）との相関を分析することによって「PISA 型読解力の向上をねらった有効な発問を作成するためにはどのような評価規準が必要なのか」をまとめることを研究の目的とする。</p>
II 研究の方法	<ol style="list-style-type: none"> 1 従来の読解力と「読み解く力」(PISA 型読解力)の違いについての明確化、及びそれぞれの先行研究や実践の整理・分析 2 「PISA 型読解力」に関する教員の意識調査の実施（質問紙調査） <ol style="list-style-type: none"> (1) 調査対象 東京都公立小学校の主幹教諭、主任教諭及び教諭 6 校 73 名 (2) 調査 ベネッセ教育研究開発センター（2007）による『PISA に対する認知と意識』の質問紙項目をもとに作成したものをを用いる。さらに教員の PISA 型読解力を取り入れた授業への取組の把握も併せて行う。 3 授業観察の実施、授業記録の作成、「教師の発問」の分析 <ol style="list-style-type: none"> (1) 調査対象 質問紙調査を実施した小学校より抽出し、5 年生の担任を対象とする。 (2) 対象教科 国語・社会 (3) 調査方法 担任の同意を得て IC レコーダーで授業を録音し逐語記録化。 (4) 分析方法 ループリックを作成し、発問分析を行う。

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>1 「従来の読解力」と「読み解く力（PISA型読解力）」の違いの明確化 「読み解く力」と「PISA型読解力」は定義として同じであると言える。その上で従来の読解力と比べたときの違いは、日本の子供の弱い力と指摘されている「解釈」「熟考・評価」「さまざまな文章や資料の読解（非連続型テキスト含む）」ということになる。</p> <p>2 「PISA型読解力」に関する教員の意識調査 質問紙調査から、PISA型読解力への認識や意識的な実践については満足な結果は得られなかったが、日頃の授業ではPISA型読解力を取り入れた授業への取組を心がけているという矛盾した結果が明らかになり、教員のPISA型読解力に対する意識の差を具現化した結果となった。</p> <p>3 OECD生徒の学習到達度調査（PISA2009）結果から見えてくるもの OECD平均に比べて、日本は依然無答率が高い。無答率は自由記述形式の問題で高くなる傾向があるとされている。自由記述形式の問題は「熟考・評価」に関する問題が多くを占めており、自分の思考の流れや、意見・考えの理由や根拠を記述させる形になっている。理由を聞く活動を効果的に授業に取り入れることで子供の読み取る力は向上するが、現状では十分に実践に移せていないという実態があり、読み取る力を付けるための発問対策が必要である。</p> <p>4 発問の評価規準の必要性 発問の評価規準の明確化ということでルーブリックを作成した。評価の観点、評価規準と教師の発問のパフォーマンス事例を併記させた。評価の観点はPISA型読解力、読み解く力の双方に共通している3つの観点を参考に「情報の取り出し」「比較・関連（解釈）」「熟考・評価（根拠の明確化）」とした。さらに、PISA型読解力の日常化を評価できるような発問を分類するための観点を付け加え、これを「構造・形式（学びの再現性）」とした。</p> <p>5 ルーブリックを用いた発問分析 ルーブリックを使用して、「児童の思考の流れに沿った発問構成であり、発問・指示が明確かつ、ねらいに迫った事例」の発問分析を行った。それぞれ主発問としてのパフォーマンス課題を見てみると、PISA型読解力の3つの観点を基に作成している。またルーブリックに照らし合わせると、それぞれ到達度は高いことがわかる。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>本研究ではPISA型読解力の向上のための授業づくりについて、授業者の実践の度合いを把握し、今後解決すべき課題を明確にすることをねらいとしてルーブリックを用いた発問分析を提案した。その結果、発問をこのルーブリックに照らし合わせることによって、子供たちの中に主体的な学びを生み出し、自己を相対化し、客観的に物事を捉え直す「メタ認知」的な能力を養うことができる発問の評価規準の有効性が明らかになった。</p> <p>一方、今回の調査では「構造・形式」に関する発問が見られず、学びの再現性が十分に行われているかについては判断が難しい。習得した力を、授業の中で閉じてしまわない真の日常化につなげることができなければ「読み解く力」の向上は望めない。今後はルーブリックが目標に準拠した評価及び個人内評価のツールとして妥当であるかについて、実践の継続及びルーブリックの客観性を高めるための手続きについて開発していきたい。</p>